わくわくショッピングモール　サンプル

自由がほしい。自由になりたい。

「なぁ、お前、俺のことなんだと思ってるわけ？」
「なにって――」
達也（たつや）はミチルの腕を強引にひいて抱き寄せると、きつい香水の香りに歪みそうな顔を懸命に取り繕った。
そのまま数秒動かずに待つ。
「カット！　オッケーです！　じゃあ休憩入りまーす！」
スタジオの空気が一気になごみ、ガヤガヤと賑やかになる。
この瞬間が達也は苦手だった。入り込んでいた役（世界）から一気に自分に――他人になったような気分になる。
達也はスタッフや共演者の目を避けるようにしてスタジオから出ると、足早に楽屋へと戻った。

店の明かりが並ぶ道。手をつないで歩く恋人たち――もう二十三時半だというのに、みんな明日

の仕事は大丈夫なのだろうか。
少し考えて、今日が金曜日だと気付く。休日前夜だ。恋人たちはこのままどこかに泊まるのかもしれない。
（いいなぁ……）
普通なら誰にでもできるそういうことが、達也にはできない。
週刊誌のカメラに、世間の目。
こういう時はゲイでよかったなと思う。自由に恋愛することができない制約を、男が好きだからという理由のせいにできる。
（恋人か……）
きっといれば楽しいのだろう。あふれんばかりの愛情を抱き、触れ合い、でも時には喧嘩をしたり別れ話をしたりして、けれどやっぱりお互いが大切で――という流れしか浮かばないのはドラマでの疑似恋愛しか経験していないからだろうか。
「何かありますか」
運転席からかけられた声に意識を戻す。
「え？」
「気になる店でもありましたか」
「いえ、別に」
達也が答えると、マネージャーはそれ以上は何も言わなかった。車列の流れにのって車を進め、マンションに向かう。
ふと、視線を感じた。バックミラーを見ると鋭

い視線とぶつかる。フロントガラスの奥に見える赤信号。監視されているような気分になる。

「お疲れですか」

「いえ……や、まぁ、少しは」

マネージャーが代わって一か月。この男と話すのは苦手だった。表情が動かず、何を考えているのかわからない。まぁ、十五も年下の相手に敬語を使い、送り迎えをし、細々と気遣わねばならないと思えば誰だって嫌になるだろう。それが仕事であっても、たぶん。

「でも大丈夫です」

マネージャーは返事をしなかった。無視をしているわけではないが、特に言うこともなかったのだろう。しばらく静かに揺られていると、車はマンションの地下駐車場内、部屋に上がるエレベーターの前に止まった。

「明日は九時にお迎えに上がります」

「はい。ありがとうございました。明日もよろしくお願いします」

逃げるように車を降りてエレベーターに駆け込む。失礼な態度だと承知はしているが、一緒にいる時間は短くした方が双方にとっていいだろう。

自宅に入ると真っ先に服を脱いで風呂に向かう。

バリバリに固められた不自然な髪を指が通るまでシャンプーし、ナチュラルメイクという名のしっかりメイクとミチルから移された香水の匂い

を洗い流す。

湯船に浸かると、ようやくそこで心にこびりついた不快感と疲れがほぐれ始めた。

（せめて自由に買い物だけでも行ければなぁ……）

たとえば街に出て、買いもしない雑貨屋の中をぐるぐると歩いて冷やかし、本屋に行ってエロ本を吟味する。疲れたら喫茶店に入ってメロンクリームソーダを飲み、移動販売車で買ったチョコバナナクレープを頬張りながら帰路につく。そしてそこに恋人が加われば言うことはない。

風呂から出て、キッチンで立ったまま常温の水を飲む。

（無理だよな……）

魔法使いでもいたらいいのに。そうしたら、こんな願いだって叶えてもらえたかもしれない。

心の中でぼやきながら、手にした携帯で『人目を気にせず買い物をする　自由　デート』と検索してみる。

せめて何か叶えるためのヒントでもあれば――しかし表示されたのは達也が求めているものとはまったく関係のないブログ記事や精神カウンセリングのサイトだった。どうやらこの検索ワードではストーカー被害や強迫性障害のようなものが心配されるらしい。

まあ普通はそうなるよなと思いながら次々とページを進めていくと、五ページ目に『あなたの

願いを叶えます。』というリンクを見つけた。リンクタイトルの下に少しだけ表示されている文章を見る限り、ここは病院関係でも闘病ブログでもないらしい。

占いか宗教か、詐欺サイトか。念のためウイルスソフトがきちんと稼働していることを確認してからリンクを開いた。

恋人とデートをしてみたい。けれど恋人ができない。

レンタル恋人を利用しても、デート中に知り合いに会ってしまったらと思うと不安で楽しめない。

いやらしい姿を人に見られたい。露出プレイをしてみたい。けれど現実ですれば犯罪になってしまう。

そんな悩みはありませんか？

私たちが叶えます。悩みをお聞きし、最善の方法で最大限、あなたの願いを叶えます。

ショッピングモールで疑似恋人とデートを満喫してみたい方はこちら

『こちら』の先にはわくわくショッピングモールと書かれたリンクがあった。

胸の高鳴りを自覚しながら、人差し指でちょんとタップする。

当サイトにお越しくださりありがとうございます。

当店は所属キャストと疑似恋愛、デートをお楽しみいただくゲイの方専用風俗店です。

十八歳未満の方は恐れ入りますが、成人されてからお越しください。

大人の方はこちら

次こそウイルスが含まれたページかもしれない。けれどまるで達也の悩みと願望をすべて見透かしているような文章に惹かれ、手を止めることはできなかった。

ご来店ありがとうございます。わくわくショッピングモールです。

お申し込みの流れ

1．キャスト一覧からお好みの相手をお選びください。寝取られや三角関係などをご希望の場合は複数名お選びいただけますが、料金はキャスト一名ごとにかかります。

プロフィールに掲載されている内容以外でお知りになりたいことがございましたらお気軽にご連絡くださいませ。

2．最初の一か月はキャストとメールや電話で

やり取りをしていただきます。
最終日にキャストからお客様に告白をいたします。会いたいと思われましたらお付き合いをご承諾ください。そうでなかった場合はお断りくださいませ。
なお告白をお断りになられた場合、追加料金なしでもう一名、別のキャストをお選びいただけます。
（またメールや電話からのスタートとなります）

３．カップル成立となられましたら、当ショッピングモールで恋人としてデートをしていただきます。
ショッピングモールは完全予約制、完全貸し切りとなっております。
※店内にはショップ店員役と客役のスタッフがおりますので、公開オナニーやセックス、スワッピングなども可能です。
もちろん健全なデートをお楽しみいただくことも可能です。
デート終了を持ちましてお申込みいただいたプランは終了となります。
引き続き同じキャストとの関係を続けられたい方は継続割引をご利用くださいませ。
継続の場合、初月のメール電話のみという縛りなく、すぐにショッピングモールのご予約をお取

りいただくことが可能です。

よくある質問

Ｑ．メールや電話の段階でえっちな話をしても大丈夫ですか。

Ａ．もちろん大丈夫です。ＳＭがお好きな場合は初日からの遠距離調教も可能です。

Ｑ．タチですがペニスに自信がありません。

Ａ．問題ございません。恋人同士に必要なのは心の繋がりです。

どうしてもご不安な場合はカウンセリングも行っております。

（カウンセリングについてはこちら）

Ｑ．店内を汚してしまっても大丈夫ですか。

Ａ．原則、商品を汚された場合は買取をお願いしておりますが、床や壁のような部分は精液でしたら問題ございません。

キャストによる執拗な責めによって失禁をしてしまった場合も問題はございませんが、故意の排泄はご遠慮くださいませ。

Ｑ．写真や動画が出回ったり、来店したことをスタッフが人に話してしまったりはしませんか。

Ａ．スタッフの教育を徹底しております。です

のでそのようなことは一切ございません。安心してお楽しみいただけます。

Q．交際経験やセックス経験がありません。大丈夫でしょうか。

A．問題ございません。カウンセリングの他に、セックス指導プランもございます。こちらはキャストに実際に会う前のプランとなっておりますのでご注意くださいませ。コンドームの使い方から腰の振り方まで丁寧にご指導いたします。

Q．ショッピングモールにはどのようなお店がありますか。

A．通常のショッピングモールとほとんど変わりません。普通のお店と同じように商品をご購入いただくことが可能です。

アパレル、ランジェリー、雑貨、家電、アクセサリー、ジュエリー、飲食店、ゲームセンター、リラクゼーション、ペットショップ、休憩用ベンチ、トイレなど。

※契約が必要となるような携帯会社や保険会社はございません。

Q．体に不自由がありますが大丈夫ですか。

A．問題ございません。ただ快適にお過ごしいただくために、場合によっては展示物や配置の調

整等をいたしますので事前にお知らせください。

利用者の声①

初めての利用でした。最初は緊張しましたがメールから始まったし、文章もとても優しくて、マメに連絡をくれて、すぐに会いたくなりました。

最初はお互いのことを話して、少しえっちな話もするようになった頃、どうしても欲望が抑えられず裸の写真を送りました。担当の人はたくさん褒めてくれて、もっと見たいと言ってくれました。

ようやく一か月が経って告白をされた時は断るなんて考えられませんでした。まるで本当の告白みたいにドキドキしました。

実際に会える時は緊張でどうにかなりそうでしたが、ショッピングモールで対面すると想像していたよりかっこよくて、勃起してしまってトイレでシコシコしてもらいました。その後は手をつないで普通のカップルのように楽しい時間を過ごしました。

それからは月に一回のデートコースで会っています。先月は貞操帯をつけてもらいました。

たくさん褒めてくれるので、次に会える時が楽しみです。

利用者の声②

メールと電話は友達のような感じでした。共通

の趣味がある相手を選んだので話が合って、とても楽しかったです。

私はＭのタチなので指名したのはＳのネコでしたが、実際に会ってみるとふわっとした柔らかい感じの子で、本当にＳなのかなとちょっと思いましたが、ショッピングモールに入るとすぐに服を脱ぐように言われて私だけ裸で店内デートをしました。

興奮し過ぎてつないだ手に汗を感じて何度も拭っていると、気にしなくていいよと優しく言ってくれました。Ｓの顔と優しい顔の、そのさじ加減がストライクでした。

ペット体験コーナーで私が檻の中に入ると、指名の子は勃起を檻の隙間から中に入れて舐めさせてくれました。最高においしかったです。

その後は起ったままの私のペニスにリングをつけてリードをつなぎ、散歩デートに切り替えてくれました。

店内にいるお客さんがお店側のエキストラであることはわかっていましたが、それでもかわいいワンちゃんですねと言われるとまるで本当のペットになったみたいで嬉しかったです。

閉店まで残り一時間になった時、指名の子は寂しそうに俯き、でも勝手に繁殖しないように空っぽにしようと言って犬の形をしたダッチワイフで交尾射精をさせてくれました。

その時に手を使うことができない私のために、私の粗末なペニスを犬のオス穴に誘導してくれたのが嬉しかったです。

もっと犬らしくなったら去勢もしようねと言ってくれたのでその日が楽しみです。

利用者の声③

もう五回目の利用です。それでも飽きることなくいつもイチャイチャデートをしています。

男同士でも手をつないで店内を歩けるのがいいです。

本当の恋人になったような気持ちになれます。

その後も、魅力的な文章が続いていた。人生で初めてデートを体験できて嬉しかった、アイスをあーんで食べさせあった、フードコートで公開オナニーをさせられて潮まで吹いた――デートとセックスの話がごちゃまぜなので羨望と興奮が交互に訪れて心が忙しい。

激しく動悸する胸を押さえながら最後まで読むと、キャスト一覧表が載せられていた。

キャストはタチとネコとリバに分けられ、それぞれ十人くらいずつ在籍している。

プロフィール欄には名前と年齢、趣味などの一般的な内容から、好きなプレイのような少しいや

らしい内容まで書かれていた。
顔写真の一部は加工され、見えないようになっていた。しかし目元は見えるし、申し込んだ後は複数の写真を見ることができるようだった。
（この人かっこいいな……）
秋吉（あきよし）と書かれたタチの男。いやらしいことが好きで、休日は一日に最低三回はオナニーをする。
（わ、性欲やばそう……）
けれどそれぐらい求められたい。腰が立たなくなるぐらい抱かれてみたい。しかも二人きりの場所ではなく人目のあるところで――
（とりあえず料金次第かな……）
蓄えはあるが、こういう店の相場はまったくわからない。ショッピングモールを貸し切るというから、きっとかなりの金額になるだろう。
料金は想像していた以上に高額だった。しかし貸し切りに加え、店員役や客役の人件費もかかるだろう。だが払えない金額ではないし、なによりその高額な料金が秘密の保証になっているような気がした。
今度は申し込みをする前提でキャスト表を吟味する。
やはり外見の好みで合致するのは秋吉だけだった。しかし運動が好き、明るいタイプと書かれている。達也はインドア派でまったりする方が好きだった。

（うーん……）

でもまあ高級店だし、客に合わせた接客をしてくれるだろう。

もう一度案内ページに戻り、秘密が守られることを確認する。万が一そういう店――しかもゲイ用――に行ったと暴露されれば芸能生活は終わり。

けれど人生は一度きりだ。楽しみたい。仕事は楽しいしやりがいもあるが、プライベートを我慢だけの人生で終わらせたくはない。でももしバレればこれまで関わってきたすべての関係者に迷惑をかけることになる。犯罪ではないからさすがにすべてがお蔵入りになるなんてことはないだろうが――。

頭の中で現実と願望を天秤にかける。

（……もしバレたら……）

そう思うと怖い。けれど欲望は膨らむばかり。

（……もし危なそうだったらメールだけでやめればいいか……）

少なくとも「店に行った」事実と証拠がなければ言い訳のしようもあるだろう。

申し込み内容を入力して、オンラインで支払いを済ませる。登録完了のメールとともに、キャストの写真一覧表のリンクが送られてきた。

改めてそちらを見る。やはり秋吉の顔はとても好みだった。名前をタップして確定ボタンを押す。

すると、『キャストに対して公開可能な範囲でご

記入ください』と書かれた質問一覧が表示された。

どうやら申し込みの際に記入した個人情報はキャストには公開されず、また、ここに入力したものも担当キャストにのみ送られるようだった。

（名前は何にしようかな）

少し悩んだが、せっかくだから本名にすることにした。仕事では芸名―業平（なりひら）―を使っているが、そもそもうまくいけば一か月後には実際に会うのだ。顔を見られればどうせバレる。

神崎（かんざき）達也と入力し、次は年齢。二十二歳。それから立場はネコ。好きなプレイは「未経験なのでわかりません」と書き、してみたいプレイのところには「手つなぎデートとイチャイチャすること」と入れておく。

（本当はＳＭとかもされてみたいけど……）

まだ秋吉の性格もわからないのにそれを書くのは少し怖い。それにここに書いたことだけしかしないということはないだろうから、仲良くなったら伝えればいいだろう。

さすが風俗店というだけあって、フェラチオやアナルセックスなどの直接的な項目についての記入欄もあった。こちらについては「好き」「嫌い」「ＮＧ」「わからない」とチェックボックスによる選択式になっている。

（嫌いとＮＧは何が違うんだろ……？）

ひとまず、ほとんどの項目に「わからない」を入

れておく。
一通り入力を終えて送信すると、今度は専用アプリのダウンロードを求められた。そちらにログインして三十分程すると、メールを受信した。
『達也くんへ。指名ありがとう！　わくわくショッピングモールの秋吉です。よろしく』
携帯に表示された文章。フレンドリーと思うべきか、馴れ馴れしいと思うべきか。
少々頭を悩ませながら親指を動かす。
『達也です。よろしくお願いします』
さて他に何を書こうか。
これからこの人と恋人ごっこをするのだ。
演技の仕事とはまた違った疑似恋愛。普段なら台本があって、用意された台詞を口にするだけでいい。しかしこの店では自分が恋愛しているつもりにならなければならない。
しばらく考えてみたがいい文面は浮かばなかったので、ひとまず挨拶だけで送ってみることにした。それに相手がどの程度仕事をしてくれるのか測りたい気持ちもあった。
返信はすぐに来た。
『返事ありがと！　達也って呼んでいい？』
『好きに呼んでください。俺は秋吉さんって呼びます』
『達也はどんなふうにいじめられたいの？　おもちゃ扱い？』

返信を読んで思考が止まった。

何だかちょっと……思っていたのと違う。おそらくSと書かれた秋吉を選んだことで、達也をMだと判断したのだろうが――。

（いや、たしかにMだとは思うんだけど……）

そういう話はもう少しお互いを知ってからするのではないのだろうか。それとも風俗店だから、手っ取り早くいやらしい方向にもっていくのか。

（うーん……）

しかしまだこれだけでは相手の人となりはわからない。たしかに第一印象は大事だけれど、仲良くなってみると思っていたのと違ったというのはよくあることだ。それに今は秋吉の方も達也の出方をうかがっているはずだ。

返信はまだしていないというのに、再びメールを受信した。

『達也はどういうプレイが好き？　こういうことをしたいとかされたいとかそういう欲望はある？　質問の答えはほとんどわからないになってたけど』

いきなりプレイの話か。先に自己紹介などはないのだろうか。

（礼儀を知らない？　それともやりたいだけって思われてるのかな……）

たしかに秋吉のプロフィールにはえっちな子が好きと書かれていたが、そう書いている人は何人もいた。達也自身も気持ちいいことは好きだが、

それなら一か月もメールのやり取りをするようなところではなく行為をするだけの風俗に行くとか、自分の手ですればいい話だ。ここを選んだのは、恋人がいる気分を味わってみたかったから。

（そういうの、理解してもらえないのかな……）

わざわざ言わないといけないのだろうか。そう思うと、心が重くなってくる。

でも指名してしまったし……と思いながら返信を打つ。

『経験がないので、これといったものは浮かびません。秋吉さんはどういうのが好きなんですか』

返信は速かった。『甘えられるの』と端的に書かれている。

（甘えられるのが好き……）

きっと秋吉は自分好みの小柄でかわいい顔立ちをした男の子にそうされるのが好きなのだろう。つまり、相手次第。たとえば相手がおじさんで、太っていて、ひげがもじゃもじゃで清潔感のない相手だったら、そんなふうには思えないはずだ。

そう思ったら、一気にテンションが下がってしまった。

返信する気になれず、携帯をベッドに置く。

そのまま仰向けで転がっていると、いつの間にか眠ってしまった。

それから一週間。

申し込みの翌日こそなんて返そうか……と考えていたが、結局思い浮かばないまま時が経ち、もう返信しなくてもいいかという気になってしまった。

お金は払ってしまっているが、三週間後の秋吉からの告白を断れば他の人を選べるようになるのだ。

しかし返信をしなくなって二週間後の二十一時、知らないアドレスからメールを受信した。

『突然のご連絡を失礼いたします。わくわくショッピングモールの松永と申します。

ご指名いただいた秋吉ですが、強引に話を進めようとしたようで申し訳ございませんでした。本日付で秋吉は達也様の担当から解除いたしましたのでご安心くださいませ。

もしよろしければ他のキャストを一名お選びいただけますと幸いです。

また、現時点ではネット上に公開されていないキャストのプロフィールも添付しておりますので、合わせてご確認くださいませ。

もし何がしかのご都合によりご返信をいただけていなかっただけでございましたら、すぐに秋吉を担当に戻しますのでご一報ください』

秋吉とは正反対の丁寧な文章だった。

二回読み直し、安堵する。秋吉に返信しなかったことに罪悪感はあったが、あちらは察してくれ

たらしい。
　秋吉には悪いことをしたが、単純に好みの相違があっただけで失礼なことをされたわけではない、とこの人に伝えておけばいいだろう。
　添付されたファイルを開く。そこには一人分のデータがあった。顔写真とプロフィール。フレームレスのメガネ。鋭い目が少し冷たく見えるインテリ系。
　直感的に、この人に責められたいと思った。
　秋吉と連絡を取った時はプレイより恋人関係を重視したい気分だったのに、この人の写真を見ているといやらしい気分になってくる。
（やば……）
　この人に、いやらしくて、けれどとてもつらいことを言われたら――具体的な責めの内容は思い浮かばないが、この人は冷酷に「まだ我慢しなさい」と言うような気もするし、励ますように「もう少し頑張りましょうね」と言いそうな気もする。どちらであっても興奮する――。
　もちろん、されるのは親しくなってからがいいけれど。
　プロフィールを確認する。立場はタチで、S。年齢は三十五でNGはなし。つまりSMだろうとスカトロだろうとなんでもいけるということだ。
　早速返信を打つ。
『お世話になります。ご連絡ありがとうございま

す。秋吉さんが何かをしたというわけではないのですが、これまで恋愛の経験がなく、どう返信したらいいかわからなくなってしまいました。すみません。でも添付してくださった方がとても好みでした。こちらの方にお願いしてもよいでしょうか』

読み返すと、とても自分勝手に思えた。いや最初から自分勝手だったけれど。

返信が来たのは五分後だった。さっき連絡をくれた松永から。

『ご返信ありがとうございます。また、お選びくださりありがとうございます。私たちのペースでゆっくり親しくなりましょう。これからよろしくお願いいたします』

文章を読んでハッとした。さっきはファイルを開いた瞬間にその整った顔立ちに目を奪われて、名前を確認していなかった。慌ててもう一度ファイルを開く。そこにはたしかに松永恵介（まつながけいすけ）と書かれていた。

（やばっ！　めっちゃ失礼な返信してた！）

必死に言い訳を考える。

『すみません、松永さんは管理や事務の方かと思っていました。ご自身のプロフィールと気付かず失礼しました。よろしくお願いします』

『いいえ、私がそのように書かなかったので。私のプロフィールを添付すると言えば、他の人を選

びにくいかと思いまして。気を遣わせてしまい申し訳ありません。お選びいただき本当に嬉しいです。達也くんと呼んでもいいですか？　私のことは好きに呼んでください』

絵文字はないし、達也の頭には写真の、冷たさを感じさせる顔が浮かんでいる。それなのに文章はとても穏やかで温かく感じられた。

『なんて呼んでもらっても大丈夫です。でも俺本当に慣れてなくて、話題とか広げられなくてすみません』

『お気になさらないでください。知り合ったばかりですから。ただ、専用のフォームを通していないので、私はまだ達也くんの好みを知らないんです。さっきネットで自己紹介用の質問項目を拾ってきました。添付で送るので順番どおりに答えてください。私も同じものを答えます。好みが合うか楽しみですね』

優しい返信にほっとしながらファイルを開く。

趣味、休日の過ごし方、好きな色／食べ物／飲み物／動物、好みのタイプ、行きたいデート先、秘密の有無、同居の家族は？　と十項目あった。

登録したときの質問一覧ではいやらしいことが多かったのに。秋吉とのやり取りを知って、そういうものを避けて選んでくれたのだろうか。

そう思ったら嬉しくなってしまった。いやらしいことはたくさんしたいし、されたい。でもいき

なりは嫌、というわがまま。それを知られれば女々しいと思われるかもしれないと思っていたけれど、松永が察してペースを合わせてくれるのならわざわざ言わなくて済む。

しかしいざ質問に答えようと思うと指が止まった。

本音で答えれば、順に、かわいい動物の写真を眺めること、えっちなことを妄想する、クリーム色、甘いお菓子、甘いジュース、毛がふわふわした生き物、男らしくて格好よくて理解があって包み込んでくれるような人、買い物や映画、秘密はもちろん有りで、一人暮らし。

しかし実際に会って正体を知られた時、番組やインタビューで答えた内容と本音に齟齬があると思われたらまずい。いや、達也のファンは女性ばかりなので松永がそこまで詳しいことを知っているとは思えないし、なにより風俗店に行ったなんてことは口外しないだろうが、「達也がかわいい系趣味だった」なんて軽い気持ちでＳＮＳにでも書かれたら――ファンの信用をなくしたくないし、夢も壊したくない。

少し考えて一問目から順に、特になし、寝る、黒、サラダ、炭酸飲料、犬、よくわからない、特になし、有り、一人暮らし、と打ち込む。

入力したものを読み返しているとメールを受信した。書いた文章を送信してからそちらを開く。

『ドライブ、録画しておいたテレビを観る以外は家事でつぶれてしまうことが多いです、白、肉、バナナミルク、ライオン、素直で頑張り屋な子、遊園地、有り、一人暮らしです。これからよろしくお願いします』

バナナミルク――一つだけ浮いた言葉。もしかしていやらしい内容の隠語だろうか。これに食いつくかどうかで猥談を受け付けるか測っているのかもしれない。

その一つを除けばなんとなく、想像どおりだなと思った。外見を裏切らないというか、違和感なくするっと入ってくる内容。遊園地というのも少し意外ではあったが、きっと無邪気に笑うような年下が好みなのだろう。

（好きなタイプは素直で頑張り屋、かぁ……）

達也のイメージはそのどちらも当てはまらない。世間からの評価はクール、かっこいい、けだるげ、ミステリアス。だから自分もそうでなくてはならないと少なくともこの数年はずっと気を張っていた。

人の評価は厳しい。少しでも自分のイメージと違うところを見れば「似合わない」だとか「残念」だとか言う。匿名で気持ちを発信できるような手段が増えたせいか、そんな言葉を使う人が増えた。そしてそれを何気なく目にした人でも無意識に同調してしまう――それはよく、達也の周りの大人

たちが口にする言葉だった。
　だから、言動には気を付けなければならない。恋愛スキャンダルはもちろん、酒に酔って失態をさらすようなことがあってはならないし、イメージとかけ離れたことをしていると知られるのもいけない。たとえば達也なら甘いものを笑顔で食べるとか、天気のいい日に洗濯ものを干す、とか。
　しかし甘いものは大好きだし、家事は面倒だが一人暮らしだから自分でする。食事だけは調理する時間がないのでレンジで温めるだけのキットを定期購入してはいるが、日用品の買い物だって必要だ。
（窮屈だよなぁ……）
　だが、一昔前のアイドルではないのだ。ギャップ萌えという言葉もあるし、このご時世、家事を何一つしていないとは誰も思っていないだろう。もしかしたら家政婦のような人がいると考えている人もいるかもしれないが、それはそれでどんな人なのかと探られたりもするから厄介だ。
　でも本当は甘えられる恋人がほしい。そして休日はべったりとくっついて過ごしたい。一日中抱っこしてもらい、たくさん頭を撫でて十分おきにキスをしてもらいたい。けれど達也の方からいやらしいことがしたくなっても言葉にするのは恥ずかしいから、無言で抱きつくだけで察してほしい。

『私たち、正反対かもしれませんね。喧嘩にならなそうです』
『好みが合う方が喧嘩にならないんじゃないんですか？』
『一緒に食事を取るとき、付け合わせのサラダを達也くんに渡してお肉をいただきます』
　これはたぶん、松永なりの冗談だろう。しかし笑いや文字がないのでどういうテンションで言っているのかわからない。
（電話だったらわかったのにな……）
　最初から電話なんて絶対に無理だと思っていたのに、ついそんなことを考えてしまう。
（嫌です笑、って送ればいいのか？）
　どうしたものかと考えているとメールを受信した。
『すみません、冗談です』
　どうしよう。冗談が通じないやつと思われたかもしれない。
『冗談かなと思ったんですが、なんて返したらいいかわからなくなっちゃって。お肉は食べたいです』
『お心を煩わせることを言ってしまい申し訳ございませんでした。ところでハンバーグ派ですか？ステーキ派ですか』
　思わぬ返答につい笑った。なんという切り替え。さっぱりしているか、もしくはマイペースなタイ

プなのかもしれない。
『松永さんはどちらですか』
『ステーキです。本当はレアが好きなんですが、友人と食事に行った際に似合いすぎて怖いと言われたので、それ以降もっぱらウェルダンです』
どう返そうか。だってあの美貌だ。考えるまでもなく吸血鬼が浮かんでしまった。しかしそう言ってしまってもいいものか――。
ひとまず肯定も否定もせずに済む質問を返しておく。
『似合いすぎってどういうことですか？』
『学生時代に文化祭のコスプレで吸血鬼の格好をさせられたことがありまして。それを覚えていたのか、その時に言った血が滴るような肉が好きという冗談を本気にされてしまいました』
（やっぱり……）
しかしまだ、そう答えていいのかわからない。ひとまず『かっこいいということだと思います』と無難に返しておく。
しかし送った後で、これでは話が終わってしまうことに気が付いた。
けれど他に何をどう言えばいいのかわからなかった。決められた言葉ならすらすらと口にすることができるのに。
達也がデビューしたのは生後間もない頃だったらしい。オムツのパッケージモデルから始まって、

気付いた時には子役、そして俳優になっていた。学校には最低限行くだけで、セリフを覚える必要があったので休憩時間に友達と話すこともできず――しかも芸能界の話はしないようにと言い含められていた――気付けば、自分の気持ちや考えを言葉にすることが不得手になっていた。

『そうですか？　では達也くんに会ったら首元を噛まないように気を付けますね。そうそう、差し支えない範囲でいいので、だいたいの寝る時間と起きる時間を教えてください。それから連絡をしない方がいい時間帯もあれば』

これは、ひとまず今日の連絡は終わりにしようという意味だろうか。やっぱり話題を提供することができなかったから、疲れさせてしまったのかもしれない。

『ずっと音が鳴らない設定のままなので大丈夫です。仕事中は返せませんが、ロック中はメールの受信さえ表示されないようにしているので誰かに見られることもないです。松永さんは都合の悪い時間はありますか』

『わかりました。ではもしご面倒でなければ寝る前に一言、今から寝るとご連絡をいただけませんか。ちなみにこちらもいつでも大丈夫です。待ってます』

（待ってる……）

言いようのない胸の高鳴り。あくまで疑似関係

だとわかっていても、楽しみに思えてくる。
『じゃあ松永さんも送ってください』
『もちろんです。これから達也くんのことをいろいろ知っていきたいし、私のことも知ってほしいと思っています。それから私が敬語を使うのはただの癖なので、達也くんは普通にお話してくださいね』
『ありがとうございます。俺も松永さんのことをもっと知ってみたいです。話し方は、松永さんの方が年上なので』
『年齢なんてお気になさらないでください』
　恋人になるんですから、と続かなかったことに寂しさを覚えながらも、その嘘のない様子に好感を抱いた。
（まぁさすがに連絡を取り始めてすぐに言ってきたら興ざめか）
　キャストは恋人にならないと歩合給が入らないのかもしれない。デートとしてショッピングモールに呼んでからが本番、とか。
『じゃあ、慣れたら普通に話します。できれば松永さんもそうしてください』
『わかりました。これから楽しみです』
　もうまとめだろう。達也としても提供できる話題がない。
　時間ももう二十二時を過ぎているのでこのまま終わりになるのだろうと思っていると、再度メー

ルを受信した。
『達也くんは明日何時から仕事ですか』
おやすみと来るものと思っていた。鞄からスケジュール帳を取り出す。
『明日は八時に家を出ます』
撮影はスタジオだ。ロケとなると移動時間がかかるが、テレビ局なら家からさほど遠くはない。
『ではそろそろ寝ないといけませんね。寝る支度はできていますか』
本当はこの後台本の確認をするつもりだった。しかし松永も寝たいだろうと「はい」と返事を送っておく。
すると想像どおり、「ではまた明日。おやすみなさい」と返ってきた。それには返さず、携帯をテーブルに置く。
携帯を持っていた手が、いつもよりも熱く感じられた。

〜〜略〜〜

アパレルショップ

ショッピングモールへの入り口は、地下駐車場から入ってきた時とは別のドアの奥にあった。店内はまるで本物のショッピングモールと見間違う

ほど広く、再現度が高い。
一番近くにあったのはジュエリーショップだった。しかしそこは素通りして進む。
「達也くん、最初に服を見ませんか」
「服ですか？」
「はい。私の選んだ服を着てほしいんです」
「ぁ……」
男が服を送るのは脱がせるためだと聞いたことがあった。別に買ってやると言われたわけではないが、まるで松永の好みに染められるような、そんな高揚感。
こちらですと言って松永が達也の手を引いた。左右には雑貨屋やドラッグストアが並んでいる。
（これ全部作り物か……）
まるで映画のセットみたいだ。今すぐ一般解放しても問題なく営業できそうなほどだというのに、貸し切りで使えるなんてすごいの一言。
「ここです。達也くんは細いからとてもよく似合いそうです」
「えっ」
松永が足を止めたのは、女性向けアパレル店の前だった。店頭のマネキンは当然すべて女で、全員がとても短いスカートをはいている。
「せっかくだから足が見える方がいいですね」
松永は店内の配置などすでに頭に入っているだろうに、まるで初めて来たかのようにきょろきょ

ろと辺りを見回しながら奥の棚に向かっていく。
「え、え、あの、ここって女性用じゃ？」
「いえ、男性用ですよ。デザインは女性が着るようなものですが、サイズはちゃんと男性に合わせてあります。でも達也くんは線が細いのでサイズはSで良さそうですね」
　達也の腰にあてられたスカート。その短さに思わず体をひく。
「や、こんなのっ」
「似合いますよ。上はこれがいいかな……鎖骨がきれいな気がするので見せつけてほしいな」
　後半は独り言のようだった。女装なんて似合うはずがないのに、松永は真剣な表情でああでもないこうでもないと次々と服をあてていく。
「ほんと、スカートなんて無理です！」
「無理じゃないですよ」
　松永は達也の話を聞いているようで聞いていなかった。一枚のスカートを手に取ると、「うんこれだな」と一人で頷く。
（絶対無理だよ……）
　それとも顔が見えていないから大丈夫と思われているのだろうか。それなら――まぁ、顔をさらさない言い訳になる。それに考えてみれば、女装してショッピングデートをするなんて、この機会を逃がせばもう二度と経験することはできないだろう。

「――よし。この組み合わせで着てみてください。サイズが合わなければ遠慮なく言ってくださいね」
「は、はい」
それに、リードしてくれるタイプは好きだった。松永の言葉に含まれる押しの強さは柔らかな表情と話し方で相殺されている。そのバランスがまたよかった。
松永が隣の棚の奥を覗き込みながら、店員に声をかけた。
「すみません、これ試着いいですか」
わざわざそんなことまで言うのか――全員同僚だろうに。
「あっ、いらっしゃいませ！　もちろんどうぞ！試着室はこちらです～！」
低い棚の奥から姿を表した男は、マネキンと同じ格好をしていた。ついスカートに目がいってしまう。
達也たちが近づくと、店員はくるりと踵を返して歩き始めた。その背中は、尻の割れ目まで見えてしまうのではと思うほど縦に深く開いていた。
透き通るような白い肌にはしみも吹き出物もない。それにしても、背中のほとんどが見えている。
「こちらです！　ごゆっくりどうぞ！」
扉ではなくカーテンタイプの試着室。靴を脱いで上がると、なぜか松永まで入ってくる。
「……あの？」

「カップルなんですからかまわないでしょう？」
「え？！」
まだ知り合ったばかりで恥ずかしい。せめてもう少し慣れてからなら――。
カーテンの外から明るい声が聞こえた。
「お客様ぁ、うちはカップルでお入りいただけるよう、広めに試着室を作っております。彼氏さんにお着替えさせてもらってくださいね」
「――と、店員さんも言ってます。身を任せてくださいね」
「あっ」
達也が戸惑っている間に、松永はテキパキと達也のシャツのボタンを外した。五月の春先。薄着だったのでそれ一枚しか着ていない。
「ああ……きれいな鎖骨……それに乳首も」
「ぁっ……」
思わず両手で前を隠し、体を反転させて視線から逃げる。
「だめです。ちゃんと見せて」
言いながら、背後から松永が両腕を達也の腹に回した。まるで抱きしめられているみたいで心臓が早鐘を打つ。
耳元に松永の吐息がかかる。
「肌もすべすべですね。やっぱりお手入れには気を遣ってるんですか」
「や、そんな……別に」

「じゃあ持ち前の美肌ということですね」
直接耳に入ってくる低い声。下半身を押し付けられると、尻に硬いものが触れた。
（え、起ってる……？）
「かわいい……達也くん」
「恵介さんっ」
勃起から逃げようと腰を前に突き出すと、松永はくすくすと余裕そうに笑った。
「かわいすぎて。でもまだちゃんと我慢しますから、早く着替えをしてデートしましょう」
「……はい」
このままここで襲われるのかと思った。でもそれでもいい――達也のペニスも硬くなり始めている。
松永に背を向けたまま、半そでTシャツを頭から被された。首元がざっくりと開いていて、ほんの少し前屈みになるだけで乳首どころか腹まで見えてしまいそう。
「サイズはよさそうですね。着心地はどうですか」
「大丈夫、です……」
「じゃあ次は下を」
ベルト外され、デニムのファスナーが下ろされる。いっそのことテキパキとやってくれたら楽なのに、松永は焦らすようにゆっくりと手を動かした。
「下着は？　ボクサーですか」

「……はい」
「色は？」
「黒……」
　もうズボンは腰に引っ掛かっているだけ。なのに松永はそっと達也の腰骨を撫でた。そこから下着の中に指先だけを滑り込ませる。
「ぁっ……」
「グレーがいいです」
「え……？」
「下着。濡れたらすぐにわかるでしょう？」
「あ……」
「最後に射精したのはあの電話の時ですね？」
「っ……」
「達也くん」
「はいっ……」
　仕事が忙しかったし、オナニーをしたいと言うのが恥ずかしかった。別に内緒でしてしまってもバレることはなかっただろう。けれど松永を裏切りたくなかった。だから結局、あの日以来一度も抜いていなかった。
「……じゃあたっぷり溜まってますね」
　松永の指が下着から抜けた。ほんの少し、爪の先程度がぴったりしたゴムの中に埋まっていただけだというのに、それがなくなってしまったことに物足りなさを感じる。
「でももう少し我慢してくださいね」

「ぁ……」
「デートプラン、たくさん考えてあるんです。楽しい時間はあっという間ですから。私は今日、年甲斐もなくはしゃいでるんです」
「……そうなんですか？」
声が掠れた。
「恋人のシャツを着替えさせるだけで勃起しているくらいですから」

〜〜略〜〜

ランジェリーショップ

そこは下着屋というよりもセクシーランジェリーショップだった。ほとんど布面積のないきらびやかな下着がマネキンに着せられ、いたるところに飾られている。
「いらっしゃいませ」
アパレルショップの店員が女装をしていたので、ここももしかしたら下着姿なのかもしれない――そう思っていたが、ふんわりとした雰囲気の店員は普通に洋服を着ていた。少し拍子抜けする。
松永が近くの棚に置かれた下着を手に取った。薄い水色のレースのTバック。一応男性器が収まる形にはなっているようだったが、素材やデザイ

ンは完全に女性向けのそれだった。
「どういうのがいいかな……達也くんはなんでも似合いそうですよね」
「ふ、普通ので」
どう考えても似合わない。こういうのが似合うのはもっとほわんとしてかわいらしいタイプの男の子だろう。
松永が手にしていた下着を棚に戻した。同意したのかと思いきや、不思議そうに首を傾げる。
「普通の？　それは本心ですか？」
「え？」
「言ったでしょう？　ここは自分を解放する場所です。常識とか社会的なんちゃらとかそんなものはすべて忘れていいんですよ」
「あ……」
「ノーパンの方が好きとおっしゃるなら私はもちろんそれでかまいません。そのつもりでしたしね。でもこうして色っぽい下着を目にすると、達也くんの着飾られた陰部も見てみたくなります。いやらしく着飾ったちんぽをみんなに見てもらいたくないですか？　私は見せびらかしながら歩きたい」
「そんな……でも……」
強引にしてくれたら松永のせいにできたのに。自らの露出願望を肯定するのは恥ずかしい。
「達也くん」
松永が達也の頬に手を添えた。濁りのない真剣

な瞳がすぐ近くから達也を見下ろす。
「素直な気持ちを聞かせてください。ここでは何も気にする必要はないんですよ」
そう言われて真っ先に頭に思い浮かんだのは、松永の好みは素直な子だ、ということだった。
（それに今ここでしか経験できないし……）
きっとまたここの予約を取るだろう。けれど仕事の都合やここの予約状況、松永のスケジュールを考えると、ずっと先になってしまう。
（やっぱり、今……ちゃんと……）
楽しみたい。思い切り自分を解放して、素になってみたい。
でも、どうしてもいきなりは無理だった。
視線を逸らしながら、それでも精一杯言葉にする。
「……恵介さんが選んでください」
松永がどんな表情を浮かべたのかは見ていなかったのでわからなかった。けれど返ってきた声は弾んでいた。
「はい。とびきり似合うのを選びます。なのでまずはサイズを測ってもらいましょうね」
「――え？」
首を傾げる。てっきり、たくさん試着させられて、いやらしいところを何度も見られて、その度にペニスを冷たいおしぼりで萎えさせられて――というのを繰り返すものだと思っていた。

「女性だってブラジャーを買う時は店員さんに測ってもらうでしょう？」
「そうなんですか？」
松永が頷く。
「特に達也くんは初めてですから。もし緩いのを買って歩いている最中に落ちてしまったら恥ずかしいでしょう？」
「それは……」
反論の言葉が浮かばない。だって恥ずかしいけれど、そんなことも経験してみたかった。「ああ、下着がずり落ちてしまいましたね」なんてわざとらしく言われて、みんなが見ている前で下着を直される。その時松永は達也自身にスカートをまくり上げさせて、ゆっくり、しかもいたずらにペニスの先端を親指でこすったりして焦らしながら――。
達也が妄想から抜け出す前に、松永が店員を呼び寄せた。
「すみません、私の恋人のサイズ測定をお願いします」
店員がメジャーを手に駆け寄ってくる。
「はーい！　ではまず乳首から測りましょうか」
「え?!」
下着――パンツじゃないのか。驚いている間に、素早く背後に回った松永が達也のTシャツをまくり上げてしまう。

「ぁっ！」
「さあ、じっとしていてくださいね。――乳首は勃起してても大丈夫ですか」
松永の問いに店員が笑顔で答える。
「勃起しやすいんですね。もちろん大丈夫です！伸縮性のあるブラジャーをご案内しますね」
「よかった。すぐにピンと張ってしまうんです」
「じゃあ勃起した状態で測りましょうか」
会話を理解するより先に、音にならない驚きの声が喉から漏れた。まさかと身を固くした瞬間、松永の指が左右の乳頭をつまむ。
「ひあっ……！」
松永がTシャツの中でくりくりと乳頭を揉み、硬くなるとすりつぶすようにこりこりとこねる。
「アッ！　んぅ、ぁ、はっ……」
ぶるっと身が震えるほどの快感だった。ついまぶたを閉じ、与えられる刺激に意識を集中させてしまう。
「ぁっ、あ、あっ……！」

〜〜略〜〜

トイレ

ＳＭショップは一階の一番奥まったところにあ

るという。
一歩進む度、今からさっき聞いたようなことをされるのだという期待にペニスの先が濡れる。
（少し落ち着きたいっ……！）
このままでは店に入った途端に目からの刺激で暴発してしまいそうだった。
ベンチでペニスを冷やしてもらうおうか――そう考えた時、視界の隅にトイレの案内板が見えた。
「あの、すみません。先にお手洗いに行ってもいいですか」
「もちろん。こちらです」
手を引かれたまま細い通路を一度折れ、トイレの入り口にたどり着く。
（えっ……?!）
男性用しかないトイレ内はガラス張りだった。しかもたいていの商業施設なら片面に小便器が並び、その向かいに個室のドアが並んでいるのだが、ここには仕切りの一つさえない。
（な、何ここ……）
小便器も透明の素材でできていて、横に五つ並んでいる。しかもそれぞれの小便器の奥には五人の男性がこちらを向いて座っていた。どうやら壁の奥はカウンターテーブルのようになっているらしい。あちらとこちらには段差が作られているようで、小便器のちょうど真ん中辺りの高さに男たちの顔がある。これではどの便器を使っても、尿

を顔にかけているように見えるだろう。
「どの便器を使ってもかまいませんよ」
「いやあの、でも」
視線を巡らす。ドアから右奥の端に洋式の便座があった。こちらの便器も透明で壁もガラス張りではあるが、周りには誰もいない。それならこちらの方がいい。そう思って足早に近づいたが、洋式の便器だと思ったそれに、便器でいうところの排せつ物が落ちる空間はなかった。まるで蓋が閉じられた状態。
「え、なにこれ……」
「ああ、すみません、おしっこではなくうんちでしたか」
慌てて頭を振る。
「え、いえ、違いますっ！」
「そうですか。でもせっかくですからお腹の中をきれいにしましょう。ここに座ってください」
「え、えっ？」
「大丈夫、怖くありませんよ」
正面から抱きしめられ、ぬくもりを感じているうちにスカートの中に手を入れられた。下着の紐を横にずらされ、体で押すようにして座らされる。
「アッ……」
閉ざされていたアナルに、椅子の突起がつぷりと入った。それはとても小さく、ぬるぬるしている。

「ぁ……ぁ……」
　本来なら閉じているはずのところが開いている。何かを咥えている。その姿を松永に見られている。
「簡単に入っちゃいましたね。ほんの一センチ程度ですから痛みもないでしょう」
「これ、なんですかっ？」
　立とうにも、正面に松永がいてそれすらできない。
「そこからお湯が出てきて中をきれいにしてくれます。吸い取るのも自動でしてくれますから、達也くんは座っているだけでいいんですよ」
　まだ心の準備はできていないというのに、松永は話しながらボタンを押してしまった。アナルに入っていた突起が次第に大きくなり、内部を広げる。
「あ、あっ……！」
「気持ちよさそうな顔……。ああ、ほら見てください。ここで達也くんがお腹の中をきれいにしているとわかって、人が集まって来ましたよ」
　左側の壁を見ると、さっきまで誰もいなかった場所に男たちがいた。右の小便器の方の男性たちもこちらを見ているように見える。しかしなぜか、視線は合いそうで合わない。
「ドキドキするでしょう？　でもマジックミラーです。本当は見えないんですよ」
「ほ、本当ですか」

アナルを広げる動きが止まると、今度はそこからお湯が体内に注入された。どうやら突起は開閉式だったらしい。

「あああっ！　あああっ、あああっ！」

「ああ、お湯が入ってきましたね。本当にかわいい」

松永がほほ笑みながら、達也のわきにあるボタンに指を伸ばした。

「このボタンを押せば、ミラーはただのガラスに変わるんですよ」

「やだっ！」

「本当に？　機械にお尻の中をきれいにしてもらって気持ちよくなっているところ、みんなに見てほしくないですか」

「やだっ……！」

想像だけだったら興奮するが、現実には見られたくない。いやたぶんあと少しこの店に慣れていたら、きっと見てほしいと思っただろう。でも今はまだその勇気がない。

「わかりました。じゃあもう少し男たちを焦らしておきましょう」

「あっ、あっ！」

腹が膨れそうなほど入れられていたお湯が一気に吸い出されて軽くなった。しかしまたすぐにお湯を注入されて苦しくなる。

「ああっ……！」

「とてもえっちですね。かわいい。気持ちいいですか？」
「あ、あっ……気持ちいいっ……」
「素直で愛らしい……。お尻の中、気持ちいいですね」
「ん……」
お湯の注入は三回行なわれた。腹がすっきり軽くなると肩を抱いて立たされ、柔らかなタオルで尻を拭かれる。
「では今度はおしっこです。どの便器を使うか決まりましたか」
五つの便器と五人の男。携帯をいじる人も食事をする人も本を読んでいる人もいる。
あちらからはただの鏡。だからこそ、こっそり浴尿プレイのようなことをしてしまう背徳感を抱く。
でも、排尿をやめようとは思わなかった。漏れてしまうほどではなかったし、そもそもトイレに行こうと思ったのは興奮を落ち着かせるためだったはずなのに、今はもうこのプレイにのめり込んでしまっている。
「……どこでもいいです」
「ではこちらに」
松永が選んだのは一番左の便器だった。目の前には四十代ぐらいの眼鏡を掛けた男性が座っている。

「このトイレは座っている人の口元をめがけておしっこをするようにすると、周りを汚さないんです」
「ロ……」
もちろん本当にかけるわけではない。けれどそこを狙って排尿するという意識だけで気分が高まってしまう。だって自らそれをするのではない。させられるのだ。本当はそんなことはしたくないのに――。
「そうです。恥ずかしいですか」
「……はい」
「わかりました。では初めてですし、ちんぽは私が持っていますね」
「あっ」
松永が達也の背後に回った。短いスカートから手を入れられ、小さな布から勃起したペニスを出される。
「こらこら。ちんぽを大きくしてしまってはおしっこが出せませんよ」
「だって……」
「だって？」
洗浄で感じていたことは松永も知っている。わかってて訊いているのだ。
（素直に……）
素直になれば松永は悦ぶ。それに達也自身も興奮できる。

「……人におしっこをかけるなんて……」
「かけるなんて？」

〜〜略〜〜

「透明なコンドームを買いましょう。どれくらいカウパーを溜められるかぜひ見せてください」
「そんな……」
「ではサイズを確かめましょう！　彼氏さん、おちんちんをしっかり起たせてあげてください」
　松永が店員に頷く。
「ええ。さあ達也くん、ちんぽを出してください」
「ぁ……ゃ……」
　もう起ち上がり始めている。触られていないのに想像だけで勃起したなんて知られたくない。
「達也くん。達也くんが淫乱なのはわかっていますから大丈夫ですよ」
　松永が達也の背後に回った。抱きしめるように前に回された手が達也の太腿を撫でる。その手がゆっくりと上がっていく。
「ぁ……あ……」
「達也くん。ちんぽを」
「っ……」
「もうちんぽは起ってるでしょう？　コンドームをつけられると考えただけで興奮してしまった無垢なちんぽを見せてください」

耳に唇を触れ合わせながら言われ、負けた。だってもう下着の中でパンパンになってしまっていて苦しい。

「ン……」

目の前には明らかにネコとわかるかわいらしい店員。せめてタチの相手ならよかったのに――けれどこれは松永の命令だから。

ぞく、とMの気がにじみ出る。

スカートを握り、ゆっくりとまくり上げる。すると中身を隠すように松永の手がペニスを覆った。

「あっ……」

「本当に硬くなってる……えっちですね」

「っ……」

松永の手がペニスを撫で回す。

「ああ……下着が濡れていますよ。ちんぽの穴に入れたローションと……カウパーですね。買ったばかりの下着をこんなに濡らしていやらしい……」

「ぁ……だって……」

「だって？」

なんでもない、と首を振る。もう頭なんて回っていない。まともな言葉なんて出てこない。

くす、という軽い笑いが耳の裏にあたる。

「さあ、ちんぽにコンドームをつけてもらいましょうね」

「えっ……」

それは松永がしてくれるんじゃないのか。

驚いて振り返ると、松永が目を細めた。
「ここはお店ですから。プロに任せましょうね」
「そんな――」
「大丈夫ですよ！　コンドームはサイズが合っていれば痛くありませんから！　しかも僕は慣れています！」
店員がトンと自身の胸を拳で叩いた。
しかし達也は、痛みに怯えているわけではない。
「さあ達也くん。しっかりスカートを持っていてくださいね」
松永の指が下着に引っかけられた。下に引っ張られ、ぽろんと陰部が零れ落ちる。
「わ、かわいい下着ですね！　とてもよく似合ってます」
「そうでしょう。私が選んだんですよ」
どうしてこんな時にマウントを取ろうと思えるのだろう。達也は恥ずかしいところを見られているというのに。
「わあ……羨ましいです。僕も恋人ができたら選んでもらおうっと」
「ええ、それがいいですよ。サイズもちゃんと把握してもらって」
「そうします！」
店員が達也の前に膝をついた。手にはすでに透明なコンドームを持っている。
「じゃあ、おちんちん失礼しますね」

返事はできなかった。見ていないとわかっていたけれど、とりあえず頷いておく。
「おちんちん、ドキドキしてますね。なんだかこっちまで緊張しちゃいます」
「コンドームをつけられるのも初めてですから」
「僕、大事な初めてをいただいちゃいますね」
店員がいたずらに笑うと松永の声がわずかに低くなった。
「これはノーカウントです」
「ははは。彼氏さん、嫉妬深いですね」
彼らが同僚であることさえ忘れてしまいそうだった。それくらい二人の会話は客と店員として自然だった。
「痛かったら教えてくださいね」
刺激を待ち望む亀頭にコンドームを被せられた。店員の指がペニスに触れる。
「ぁっ……」
「ん？　達也くん、感じてるんですか」
「や、ちがっ」
「はは。彼氏さん、めちゃくちゃ焦らしたんじゃないですか？　おちんちん、もう爆発しちゃいそうですよ」
「やっ……あっ」
言わないで、と言いたかった。けれど口を開けば嬌声しか出てこない。
店員の手がくるくるとコンドームを伸ばしてい

く。
「はぁ、あ……」
「もう終わりますよ――はい、できました」
「どれどれ」
松永がスカートを握ってさらに持ち上げ、そこを覗き込む。
「ああ……かわいい。よく似合っています」
「う……」
それよりもう射精したかった。今なら店内を汚すことはないしかまわないだろう。
「ではサイズ感を確かめましょう」
「え……？」
こちらへ、と言って店員がレジの方に歩いていく。
「あの、でも痛くないし――」
「達也くん、いいから行きましょう」
これでちょうどいいのに。
動こうとしない達也を、松永が半ば強引に腰を抱いて歩かせる。
「こちらです！　こちらにおちんちんを入れて腰を振ってください」
レジの台の上。そこに置かれていたのは据え置き型のオナホールだった。完全に透明で、入れたものが丸見えになってしまうもの。
「えっ」
「さあ達也くん。ちんぽを入れて腰を振ってくだ

さい」

〜〜略〜〜

ゲームコーナー

写真を撮るというのは、どうやらプリントシール機のようだった。連れられて入ったゲームコーナーの一角、大きな機械の中からおすすめだというものを松永が選ぶ。

「さあ、中に入って」

「や、本当に写真とかはちょっと」

「大丈夫ですから。信じてください」

「でも――」

「ネガのようなものは一切残りません。すべてデジタルで、現像された時点でデータは完全に削除されます。残念ながら印刷されたものは達也くんにしかお持ち帰りいただけないので、私はじっくり見て目に焼き付けます」

それなら……と思うしかなかった。あとは信用の問題だ。

「貞操帯もつけたいところですが、先にこのまま撮りましょう。せっかくコンドームデビューしたんですから――ああ、やっぱり達也くんはいやらしいですね。またちんぽをビンビンにして」

達也のスカートをまくった松永が満足げな笑みを浮かべる。

ただ単にジュエルのせいで勃起し続けたままになっていただけなのに、これではまるで撮影を望んでいたみたいで気まずい。

「服も下着もコンドームも本当によく似合ってますよ。さあ、カメラの前に立って」

松永がボタンを押すと、金も入れていないというのに機械が立ち上がった。ブース内が一気に明るくなる。

「自由モードとコースモードがあるんです。先にコースモードで撮りましょう」

わからないので任せることにした。松永が操作するのを隣で見守る。

コースを表示していた画面がカメラ画面に切り替わり、戸惑う達也の姿が映った。

子どものようなかわいらしい声で案内が始まる。

『おっまたせ～！　まずはおっぱいを撮るよ！　フレームにえっちなおっぱいを合わせてね！　最初は右だよ！』

（えっ……）

まるで似つかわしくない言葉。しかし松永は戸惑う達也の背後に立つとTシャツをまくり上げた。

「ほら、早くしないと撮影が始まってしまいますよ」

カメラの前に立つことは慣れている。けれど今

は、仕事のそれとはまったく状況が違っていた。
「え、えっ？」
「あ、もう少しぷっくりさせたいですね」
「ひああっ！」
松永が達也の乳首をくにくにとこねた。つぶされ、転がされ、突然の強い刺激に思わず前屈みになる。
「ぁっ、アッ！」
「ほら、胸を張ってください。乳頭はしっかり勃起しましたから、ブラジャーからおっぱいを出しましょうね」
こんな撮影だなんて聞いていない。いくらなんでも恥ずかしすぎる。
（でも……）
ここでしか体験できないこと。それに今日は自分を解放したい――。
「ン……」
体から力を抜き、松永に身を任せる。
松永は小さなブラジャーを指でずらすと、ピンと起ち上がった乳頭を画面に映した。
「もう少しカメラに近づきましょう」
一歩踏み出し、画面に表示された丸い枠に右の乳輪がぴたりとはまる位置を探る。
「ああ……とてもいやらしい……」
松永のため息に興奮が高まった。このまま襲ってくれたらいいのに。そうしたら――。

『撮るよお～！　動かないでね！』
一拍置いてパシャ！　と音が鳴った。
『じゃあ次は左のおっぱいだよ！　さっきと同じように乳輪をフレームに合わせてね！』
「達也くん、もう自分でできますか？」
「ぁ……」
松永がしてくれたらいいのに。けれど、達也の体は勝手に顎を引いていた。
松永の手がTシャツから離れた。自分でまくり上げ、フレームの位置に合わせる。
「恥ずかしいところを撮られる興奮で乳輪まで膨らんでいますね」
「っ……」
『撮るよお～！』
パシャ！
『上手に撮れたよ！　次はお尻を撮るよ！　後ろのポールに掴まって、お尻をカメラに突き出してね！』
「達也くん」
「……はい」
興奮し過ぎて苦しい。それでもまだ射精させてもらえないことに興奮が増す。
ポールに掴まり、さっきの四つん這いと同じように尻を突き出す。
「上手です。下着をずらしますね」
脱がされるのかと思ったが、松永は紐の部分を

横にずらしただけだった。
『撮るよ～！』
パシャ！
『最後はおちんちんを撮るよ！　しっかり勃起させてね！』
やはりそこも撮るだろう。わかってはいたが、本当に撮るのか、とも思う。
「さあ、コンドームデビュー記念ですから、ちゃんと撮りましょうね」
達也がカメラに向き直ると、松永がまた背後に立った。すっとスカートの中に手が入ってきて、下着をずらしてペニスを取り出す。
「ああ……かわいいちんぽ。いじってもらえないのにこんなに健気に膨らませて……」
「やぁ……」
そう思うならいじってくれたらいいのに。射精させてくれたらいいのに。
「いじらなくてもちゃんと勃起できています。しっかりとスカートを持って、腰を突き出してください」
さすがにフレームは表示されなかったので、隣に立った松永をちらちらと見ながら位置を確かめる。
「そう、そこでいいですよ。でもスカートはもっとしっかり持ち上げましょう」
「はい……」

まるで露出狂だ。でもこれこそ夢見ていたプレイ。

『はい！　撮るよ～！　ちんぽギンギン！』

～～略～～

一週間後

マネージャーの車の後部座席に収まり、カバンから携帯を取り出す。松永からのメールは五通。頬が緩む。

『お疲れ様です。今日の夕食はハンバーグです。豆腐とひじき入りで健康を意識してみました』

『あんかけにするのに、片栗粉がありませんでした。今スーパーに向かっています』

『ついでにバナナも買いました。見切り品で黒いどろどろのバナナが売っていたので冷凍しておきます。これくらいがちょうどいいんですよね』

『できました』

こちらは写真付き。真っ白な皿に、おいしそうなハンバーグとニンジンやブロッコリーの付け合わせが載っている。

『達也くんと食べたいです』

しかし最後のメールを受信したのは、写真付きのものから三十分後。

（いや絶対食べ終わってるじゃん）

おちゃめな様子が楽しい。

それに届いているメールはまるで日記だ。達也が返信できなかったから会話にならなかったのだろうが、生活を教えてもらえていることが嬉しい。

「何かいいことでもありましたか」

慌てて表情を取り繕って上を向くと、マネージャーがバックミラー越しに鋭い目で達也を見ていた。

「え――いえ、何も？」

「恋人ですか」

「いえ！　そんな人いません」

「片思いもやめてください」

吐き捨てるような口調だった。

言いたいことはわかる。恋愛のスキャンダルはご法度だ。自分の仕事がなくなるだけならまだいいが、場合によっては違約金が発生したり、撮影中のものがお蔵入りになったりもする。そうなれば何十人、何百人に迷惑をかけることになる。

しかし人を好きになるとか、好きじゃなくなるとか、そんなことは自分の意思ではどうにもできないことだろう。できるのはただ隠し通すことだけだ。ひっそり、自分の心の中だけに留めておくこと。

「……そういうんじゃないので」

そしてこれは紛れもない事実だ。実際に今、胸

は鋭く痛んでいる。
「最近やけに携帯を気にしているようですが」
「そうでしょうか？」
うまくごまかせているだろうか。こういう時に嘘がつければいいのだが、うまい言葉が出てこない。
（そんなわかりやすい顔してたのかな……）
いや、松永からのメールを見れば可笑しくて、ほほ笑ましくてつい笑ってしまいそうになるのだ。恋愛感情なんて関係なく、こんなメールが届けば誰だって表情を緩ませるだろう。
マンションに着き、礼を言って車から降りる。
（……早く会いたい）
松永に。松永といる時だけは素でいられる。自由でいられる。早くショッピングモールに行きたい。ただの人間になりたい。
しかしまだ、次の予約は取れそうになかった。撮影が忙しく、オフでも台本を覚えなくてはならない。結局休みらしい休みはまだ先になりそうだった。
（仕事、辞めちゃおうかな……）
自ら辞めるのなら、仕事が落ち着いたところで引退すれば誰にも迷惑をかけずに済む。達也の事務所には人気のある俳優がたくさんいるのだ。多少の打撃はあるだろうが、経営が傾くようなことにはならない。

（でも辞めても撮られたりするんだよなぁ……）

引退しても、週刊誌の記者は追いかけてくる。数年が経てば落ち着くのだろうが、それまでにもゲイ向け風俗に通っているなんて掲載されたら――。

（日本から出れば平和なんだろうけどなぁ……）

しかし外国語は話せないし、なにより松永はいないし、ショッピングモールもない。

それに、今の仕事を辞めたらショッピングモールに通うことはできなくなるだろう。普通の仕事をしていて頻繁に使えるような料金ではない。達也が作詞作曲もできる大人気歌手だったら印税で食っていくこともできたのだろうが、そちらの方面はからっきしだ。

部屋に入り「今帰りました」と松永に送ってから携帯と貞操帯を持って風呂に向かう。

今だけの解放されたペニス。けれど射精は当然許されてはいない。

浴室の台に携帯を固定し、顔が映らないことを確認してから松永にテレビ電話をかける。

『おかえりなさい。お仕事、お疲れ様でした。ちんぽがよく見えますよ。もう起ち上がり始めていますね』

「はい……」

恥ずかしい。けれど早く風呂を終えてすっきりしたい。松永に言われる前に、水をかけてペニス

を萎えさせる。
『達也くんは本当にいい子ですね。さあ、ちんぽを洗ってください』
「ン……」
泡をたっぷりつけた手でペニスを撫でる。本当は思い切りこすって射精したいけれど、それが許されないことに興奮する。
『ああ、ちんぽが膨らんできてしまいましたよ。勃起するとつらいのは達也くんですから、もう一度お水をかけましょう』

十三万字です。
エロたっぷりです。
よろしくお願いいたします！

©gooneone（ぐーわんわん）
2023/ 5/ 25
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。
※この作品はフィクションです。
実在する人物、団体等とは一切関係ありません。